

銀賞

身を持って思う人権

横須賀市立鴨居中学校三年

酒井俊平

僕は生まれつき両足に変形があり、生後半年で入院し手術をした経験がある。その時両親が体験したことをよく話してくれる。

僕は入院するまでの間通院していたが、ある時待合室で僕の足の変形をジロジロと見て「あの足、曲がってて変だね。」と笑いながら、ひそひそと話をしている人がいて、両親は「そんなことをいう人がいるんだ。」と、とても悔しくて悲しい気持ちになったそう。また、町を歩いていても振り返って見られることが多々あり、だんだん人の目が気になって、もしかして他人から「足が不自由でかわいそうに」「なんで足の形が変なんだろう」と好奇の目で見られているのではないか、「こんな足では歩くことができないのでは」と偏見の目で見られてるのではないかと思うようになり、外出する時は僕の足をタオルなどで隠しできるだけ人の目に触れないようにしたそう。

幸い僕の足は手術により変形を直すことができた。手術中、待合室で出会った車椅子に乗った子供の親からこんな話を聞いたという。それは、朝の通勤ラッシュで病院に来るときに、

「混んでいる時に車椅子なんて邪魔。」とか、

「エスカレーターを止めるな。」

と怒鳴られたが、その人は

「そういう人はほうっておけばいい。」と、ケラケラ笑って言ったそ
うだ。両親はそれを聞いて「なんて強い人なんだろう。」と励まされ、
勇気づけられ、また、そういう偏見の目が世の中の知らないところ
ではたくさんあると同時に、人の目を気にすること自体がある意味
偏見ではないかと両親は思った。

手術後数年間特殊な装具を足につけなければならなかったが、両親は僕の足を隠さなくなり、足の事を人に聞かれても隠さずに話せるようになったそうだ。そして、僕には「あなたの足はあなたの個性だから、この先誰かに何か言われても堂々としていいんだよ。」と話してくれた。

今は足の変形も治り装具もつける必要もなくなったが、両足に大きな傷跡がある。何回か友達に、

「どうしたの？その傷。」と言われたことがあるが、手術をして治したこと、足首があまり曲がらず正座ができないこと、普通の人より足が疲れやすいことを僕は堂々と話せる。そのため運動は苦手だが自分にとって決してマイナス要素ではない。逆に自分の不得意なこ

とが自覚できるため、それを克服してみせるとか、克服するのが難しければ、ほかの手段で苦手な個所を補ってみせるなど、むしろ前向きにとらえられることが出来るようになり、これは自分の個性の一つなんだと思えるようになった。また、車椅子の話を聞いて、子供にとって車椅子は日常生活の必需品である。それを「邪魔だ」なんていうことは自分勝手にその子供の人権を認めないひどい言葉であると思う。大人になったらこのような人間には絶対になりたくないと思つた。

日本には約一億三千万人という数の人々が住んでいる。その中で、何らかの障害を七百万人という数の人々が患っている。これは二十五人に一人は障害を患っているということになる。その中でも、生まれつき体に障害を患っている人よりも、突然何らかの出来事で身体が不自由になってしまうケースの方が多いというデータがある。そう考えると、いつ誰がそうなるか分からない。

障害は自分の能力の中で不得意なことの一つであり、本来人間は得意なことと不得意なことがあるので、困っている人がいたら助け合つて生活をする必要があるのではないか。不得意なことに対して文句を言ったり、バカにしたりしてはその言葉を言われた人は悲しい気持ちになってしまう。そもそも何の関係もない人が他人を傷つ

けることは他人の人権を犯すことになる。人権を守るということは言葉の暴力を投げるのではなく、心が温かくなるような言葉を交わすことや、困っている人を助けることではないだろうか。

僕はそもそも障害者という言葉がおかしいと思う。なぜなら障害というハンデはその人を作る個性の一つであり、そんな大切なものを差別的に分類してしまうことになるからだ。見た目でその人を決めてしまうのではなく、人それぞれの個性だと思えば、その人の人格を分かち合うことができる。

お互いを理解しながら協力し合えば日々の生活を向上させていくのではないだろうか。これからいろいろな人と出会う中で、両親と身を持って経験した事を考え学びながら信念のある大人になっていきたい。